

「節英のすすめ」脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ

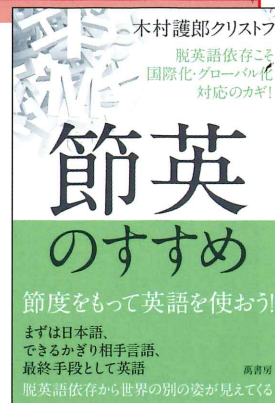
木村護郎 クリストフ 著 萬書房
2016年12月刊 288ページ

高橋 絹子

書籍紹介 1

本書は言語社会学者で上智大学外国語学部ドイツ語学科教授の木村護郎クリストフ氏の著作である。「節英」という言葉は、「節電」から派生した造語で、「自分の英語使用がどのような意味をもつかを自覚して、節度を持って使うこと」と定義している。著者は巻頭で「『グローバル化時代』に対応するためにはひたすら、英語力を高めていくしかない。あるいは英語ができなければこれからの『グローバル社会』でやっていけないといった脅迫観念から自由になろうというのが本書の基本的な主張である」と述べているが、本書にはその具体的な意味が著者の研究と豊かな国際経験に基づいて例を挙げて説明されている。ドイツの一部の地域で話されているソルブ語やポーランド語を話すことのできる著者は、まず世界を英語だけを通して見ることの危険性を指摘。世界の多数派は英語の外にい

ることから、英語ができることでそれが世界のすべてであると思ってしまうことにも警鐘を鳴らす。「とりあえず英語をやっておけばなんとかなる」ではなく、英語を勉強する際には、目的を明確に、電気と同様、まったく使わないということではなく、頼らなくてよいところは使わずに、無駄な利用はやめるべきと提唱する。その代案として、大阪女学院大学が導入しているイングリッシュ・プラスワン同様、隣国の言葉など英語以外の言語学習や、さらには通訳者の利用も勧めている。国際化の進む社会において、意志疎通を行うことの奥深さを改めて考えさせられる1冊である。



8

外国語学習とコミュニケーションの心理 — 研究と教育の視点 —

八島智子 著 関西大学出版部
2019年3月刊 236ページ

山本 淳子

書籍紹介 2

著者の八島智子氏は、第二言語不安や動機づけ研究における第一人者で、国際的志向性 (International Posture) という概念の提案者である。この書は、2004年に出版された「外国語コミュニケーションの情意と動機」の改訂版で、15年間に蓄積された新たな研究の成果が加えられている。八島氏の専門分野である外国語コミュニケーションと動機づけ、不安、である、Willingness to Communicate, WTC (コミュニケーションに対する学習者の意欲を表す概念) についての研究とそれらの教育への応用などが中心となっている。

本書を読むと、異文化コミュニケーションが動機づけに与える影響がいかに大きいかかわかる。留学などの異文化接触を通して、英語を使う必要性を痛感することでWTCが上昇するのである。留学をしなくても、筆者がいうところの「教室の先に広がる異文化コミュニケーションの可能性」を考慮して授業をデザ

インすれば、同様にWTCは上がるだろう。

最終章の「教育実践への展望」では、コンテンツ・ベースの教育に言及している。「伝える内容を持たせること」により「WTCを養うこと」さらに「WTCを発揮するための手段 (英語力)」の3つを包括的にとらえることが肝要で、それにより八島氏が理想とする「世界に響く voices を創る」ことができるのだという。

今後は、コンテンツ・ベースに加え、コンピテンシー・ベースの教育の比重も増えていくだろう。知識の習得とともに、知識を使う能力を育てる意識が重要になる。日々の授業で、思考力やコミュニケーション能力などを鍛えて、学生と共に「世界に響く voices」を発信していきたい。

